

## 「バートン版 千夜一夜物語」全11巻

リチャード・F・バートン(編) 大場正史(訳)

筑摩書房 2004年8月10日刊

『千夜一夜物語』あるいは『アラビアン・ナイト』といえば、子供の頃に「シンドバッドの冒険」、「アラジンと魔法のランプ」、「アリババと40人の盗賊」など、日本の風土とは全く異質の不思議な雰囲気を持ち、登場人物が実に生き生きと活躍する話に引き込まれた方も多いただろう。

この物語は、一人の作家によって書かれたものではなく、西はトルコからエジプト、東はイランからインド、シルクロードの果ての中国、南はアフリカのタンザニアにいたる広範な地域にまたがるフォークロア（民族伝承）を15世紀ごろに集成したものである。それゆえに、それぞれの物語がどの地域、どの民族の伝承を起源とするのかは学問研究の対象とさえなっている。

本書は、子供の頃に読んだと思っていた本が、大人になって原書を読むと、全く違うことを実感する典型例である。

実際、本書は大臣の娘であるシャーラザッドがシャーリアル王に語り続けた夜話という設定だけに、艶話が多い。経済や経営に関心があれば、アラブ商人のものの考え方や、バザールでの商取引の慣行などが実に良く書かれていることがわかる。アラブ商人は、安く仕入れた商品を高く売れる場所に運ぶことで、価値の創造を行ってきた。取引は主として相対取引で、相手の足下を見て、時にはべらぼうな価格を提示しながら、交渉を通して値下げを行っていく。これは、一カ所に店を構えて、同じ商品を同じ値段で売るという、我々に馴染みの商取引とは異なっているが、その行動には合理性がある。また、大人になれば、冒険物語や魔法よりも、人生の浮き沈みや栄華の虚しさなどがユーモアを交えて語られた物語、例えば、第31夜から34夜にかけて語られた「床屋の身の上話」などが気に入るだろう。

本書のページを開けば、アラブの大気、砂漠からやってくる駱駝の隊商、羊を追うベドウィン族の若者、そしてアラブの老人が、かがり火をかこんで、草原の塚さながらに服の裾をひらいて坐りこみ、女も子供も車座の外側に影法師のようにじっとたたずみ、豊饒な物語に耳をすませて、息をのんで聞いている姿が目につく。また、アラブ人、ペルシャ人、インド人、ユダヤ人、アフリカ人、中国人が互いにいがみ合いながらも、互いを必要として共存している姿も印象深い。

現在イラク戦争やパレスチナ問題など中近東諸国で発生している対立や報復を目にするにつけ、一日も早く、寛容と慈愛の心をもって、平和な日々がこの地に戻ってくることを願わずにはおれない。